

小林秀雄「蘇州」をめぐる

陸 艶

〔抄録〕

私は主に日本近代文学の蘇州との関わりを研究している。蘇州と係わった著名な文学者には、芥川龍之介や司馬遼太郎などが居るが、本論では昭和一三年に従軍記者として中国に渡った小林秀雄の紀行文「蘇州」について考察する。当該作品は戦時下の検閲によりその一部が削除されている。記事にした蘇州の状況と、そ

の一部が削除されたことが小林秀雄に対して、どのような影響を与えたのかを探ってみた。

キーワード 削除・検閲・占領直後

はじめに

私の故郷が中国の蘇州であることから、この数年、蘇州と日本の関わりについて、文学的側面より探求している。

古来より蘇州に関しては漢詩の世界で日本には伝わっていたが、近代文学としての蘇州との関わりは、作家や評論家が直接中国を訪問し始めた明治からであり、大正・昭和と続く。その中には芥川龍之介や司馬遼太郎など著名な作家がいるが、特に蘇州に関わりが深かった小林秀雄の紀行文「蘇州」（昭和一三年発表）に注目した。当時の紀行

文は大衆に世界の情報をもたらす現在の情報誌のようなものといってもよいだろう。小林の紀行文は大衆への貴重な情報であったが故に検閲され一部が削除されたと考える。

小林秀雄の「蘇州」は昭和十三年（一九三八）六月に「文芸春秋」に掲載されたが、内務省によって一部分が削除された。ここで私が抱いた疑問は、どの様な理由でその文章の一部が削除されたかである。また小林秀雄がこの削除をどのように受け止めたかも考察する。

一 当時の時代背景

当時の時代背景を辿ってみると、昭和六年九月の満州事変をきっかけに日本は中国への侵略を開始した。六年後の昭和十二年（一九三七）七月の盧溝橋事件（北京西南）を発端として戦火は「北支」（現中国の華北地方）周辺へと拡大した。いわゆる「支那事変」である。また、八月の第二次上海事変勃発以後は「中支」（現中国の華中地方）へも飛び火、次第に中国大陸全土へと戦火は拡大し、日本と中華民国は本格的な戦争の様相を呈していった。アメリカは空軍志願隊を送り、中華民国側を援護した。日本政府は「今次ノ対米英戦争及ビ今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルベキ戦争ハ支那事変ヲモ含メ大東亜戦争ト呼称ス」と発表した。昭和十三年（一九三八）に小林が蘇州を訪れる一年前のことで、上海、杭州、南京、蘇州はすでに日本の占領地であった。従軍記者としての小林秀雄は中国現地の事実を紀行文とするが、その作品の一つである「蘇州」の一部が検閲により削除された。思想や表現を制限する時代なので、小林秀雄にとって、ある程度の削除は予測できていたのかもしれない。以下、小林の中国の報道文を検討し、さらにその意味を考えてみたい。

二 小林秀雄の紀行文

小林秀雄は昭和十三年（一九三八）三月二七日から四月二七日まで、「文芸春秋」の従軍記者として中国に渡り、蘇州を訪れている。その間に杭州で火野葦平に第六回芥川賞陣中授与式を挙行した。後に南京、

蘇州へと行き、四月二八日に中国から帰国した。帰国後、六月に明治大学教授に昇格。同時期の「文芸春秋」六月號（六月一日）に紀行文「蘇州」を発表した。

小林は特派員として中国へ渡ったが、軍の許可が下りなかったのか前線には行かなかつた。そのせいか、または検閲によるせいか、紀行文には戦闘の爪跡にかかわる記述は殆ど無く、占領後の穏やかな蘇州の情景が描かれている。

後年、小田切秀雄氏・平野久美子氏・伊藤整氏らの小林に関する記述、及び小林自身の回顧から、紀行文の一部が削除された事が明らかになっている。

小田切秀雄氏の記述によると、^①

出版前の五月十八日、「蘇州」の記事は軍閥関係の慰安所（淫売所）を露骨に紹介、三一二〜三一三頁が削除、された。

平野久美子氏は、読売新聞の『「財産運用」発禁 文春に削除 光る検閲の眼』という記事で次のように取り上げている。^②

警視庁検閲課では京橋区銀座西入ノ四小瀧ビル内勝田貞次氏主宰の景気研究所発行の経済雑誌『財産運用』五月十九日号を十九日発禁処分にした。同誌は前にも財界を混乱さす恐れありとして発禁処分につされたことあり今度は論文『景気概観』が忌諱にふれたものでその論拠、思想等につき取調を進めてをり、当局の経

濟部門への検閲方針強化が見られる。なほ同課では麴町区内幸町二ノ三大阪ビル内文芸春秋社発行の「文芸春秋」六月掲載の同誌特派員小林秀雄氏執筆になる戦線視察記『蘇州』を削除処分にした。小林氏お得意の筆先が少し廻りすぎて安寧秩序を棄す惧れありといふのである、同誌としてはめずらしい筆禍事件だ。

また、伊藤整氏などが編集した「日本文学全集」の解釈によると、^③「三月、『文芸春秋』特派員として中国へ渡り、『杭州で芥川賞陣中授與式を舉行する』（『文芸春秋』五月號「杭州」より）同誌翌月號には、『蘇州』が出たが、これは検閲のため削除に遇っている」。

一九三八年の六月に「蘇州」が削除にあつた。原因は小田切秀雄氏によると「軍閥関係の慰安所（淫売所）を露骨に紹介したために風紀の理由」や「安寧秩序を棄す惧れありといふ」のである。戦争への好奇心を持つ小林秀雄は紀行文「蘇州」で現地の情景や生活をそのまま、生々しく描いた。戦場の後方ですでに安全平穩となつた地域の記述ではあるが、「慰安所」「街の破壊」「部隊の宿舎は皆城外」などの詳細を記述した文は安寧秩序を乱すとして内務省には許せないものであつたと思われる。まして、国民への報道記事でもある。真実を報道されるのを恐れるとすれば、削除するしかなかつたであろう。

また、小林自身も後の「文芸春秋」、昭和二三年（一九三八）七月、『話』に発表した、「従軍記者の感想」で、一部削除について、

「文芸春秋」に掲載した僕の通信文が削除になつた。これは僕が

無邪氣に筆を走らせ過ぎた爲で、理由を聞かされ成る程と思ひ、別に不服には思はなかつた。通信文を書くのに、いろいろ制限があつて悪からうと人に言はれるが、さういふ事は対して感じなかつた。向うに行く前には、自分でもその不安はあつたが、行つてみると詰らぬ心配をしたものだと思つた。戦争の裏面が知りたい氣持ち、戦争に關する暴露的好奇心といふ様なもの、そんなものは現地に行くとき直ぐ無くなつて了ふのである。物珍しく、さういふ話に耳を傾けるのも暫くの間だ。（略）蘇州の北寺塔の傍で見た乞食は、お辭儀でおでこを土に付けるので、おでこが黒く肝臓の様になつてゐた。日本に還つて、友人と建長寺に散歩に行き、乞食を見て、思はず「日本の乞食はいゝ風をしてやがる」と口に出た。乞食は聞きつけて怒り、長い事僕等の後から罵聲を浴びせてゐた。（略）蘇州で、愚劣極まる寺や庭を澤山見物し、城壁に登り、たんぼゝの綿毛が雪の様に飛ぶのを見乍ら、一服してゐる間にこんな考へ浮んだ。この街は南京でも杭州でも同じ事ではあるまいか。現代の日本人が古い日本を知る事に較べれば、現代の支那人が古い支那を知る事は、比較にならない程困難なのではあるまいか。

と後述している。削除の理由と削除に対する当時の小林の思いは以上の通りである。

次に一部を削除された「蘇州」の紀行文抜粋より小林が占領下の蘇州で何を視ていたかを検証する。ここで、小林秀雄が『文学』で再発

行した「蘇州」を検討し、占領直後蘇州の街の様子について冒頭を掲載してみる。

蘇州は戦前より人口が増えたといふ。皇軍大歓迎の飾り附けの色も褪せ、街はもう殆ど平常な状態に復してゐるらしく見えた。銀行めいた石造の大きな建物に頑丈な鐵門が開かれ、「慰安所」と貧弱な字が書いてある。二階の石の手摺のついたバルコニーに、真ッ赤な長襦袢に羽織を引ッ掛けた大島田が、素足にスリッパを突ッ掛け、煙草を吹かし乍ら、ぼんやり埃っぽい往來を見下ろしてゐる。同行のA君と顔を見合せて笑ふ。何が可笑しくて笑ふのか。無責任な見物人の心理は妙なものである。

街の破壊は殆ど言ふに足りない。部隊の宿舎は皆城外にあつて、城内の大通りには、下士官以下通行禁止の札があり、兵隊さんの姿はあまり見られず、占領直後の街といふ印象を受けない。芝居、映畫、デパート、其他の商店も皆店を開け、往來する人々の顔も和やかだ。

斷髪の娘で、ロイド眼鏡を掛けたのにはよく出會ふ。ビロートの服で、赤い大きなハンド・バッグを持ち、ロイド眼鏡を掛けたのが、砂糖を齧り乍ら、芝居でキキキ喚いてゐる。

占領直後の蘇州ではあるが、「占領直後の街といふ印象を受けない」とし、「斷髪の娘で、ロイド眼鏡を掛けたのにはよく出會ふ。ビロートの服で、赤い大きなハンド・バッグを持ち、ロイド眼鏡を掛けた」のようなモダン都市の様相を呈しているとす。また、蘇州の子供が

仁丹をねだっている様子も見られる。

前掲の小田切秀雄氏が「軍閥関係の慰安所(淫売所)を露骨に紹介した」ために『文芸春秋』版では削除されたと述べているが、慰安所については、『文学2』版で以下の記述のみが残っている。「慰安所」と貧弱な字が書いてある。二階の石の手摺のついたバルコニーに、真ッ赤な長襦袢に羽織を引ッ掛けた大島田が、素足にスリッパを突ッ掛け、煙草を吹かし乍ら、ぼんやり埃っぽい往來を見下ろしてゐる」

「慰安所」や「慰安婦」の問題は、現在こそデリケートな政治問題であるが、当時はその存在自体は当然自明のことである。それでも削除したということは、削除部には「慰安所」の様子を描写した文から占領地の裏側の荒廃した様子が伺え、皇軍たる日本軍のイメージを損なう恐れが有るとして、削除されたものと推測する。

ここで、「蘇州」の初出誌である『文芸春秋』(昭和一三・六)の削除した資料について分析していきたい。その資料を便宜的に、①国会図書館所蔵本、②京都大学所蔵本、③同志社大学所蔵本、④大谷大学所蔵本とする。

小林秀雄の「蘇州」の削除した部分は312頁から314頁まで3頁に及んでいることがわかる。

資料①は、国立国会図書館から入手したもので、マイクロフィルムからコピーしたものである。一枚白い紙に大きな文字があり、それは、昭和13年6月号「蘇州」p312～p314迄削除」と書かれている。勿論これは資料を扱った人が書いたものと推測できる。

資料②では、その頁の中央の上部に「三一二削除」という文字がはつきり書かれている。さらにページを繰っていくと、312頁から315頁に跳んでいるのが分かる。

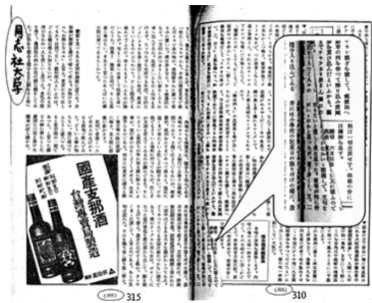
国立国会図書館資料

昭和13年6月号
「蘇州」小林秀雄
P.312～P.314 迄削除

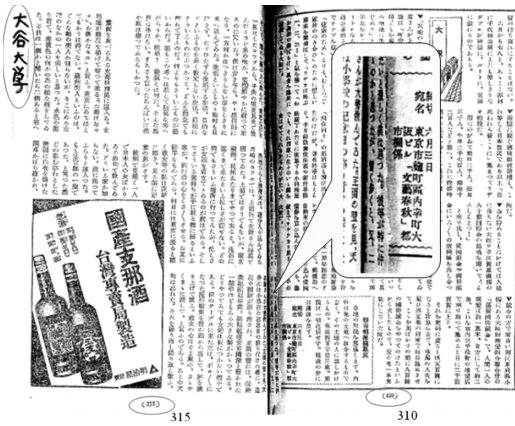
資料① 国立国会図書館



資料② 京都大学



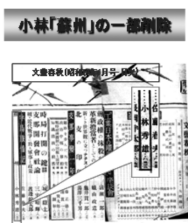
資料③ 同志社大学



資料④ 大谷大学



目次と奥付



ここで、資料③を見てみると、ちぎられた後が残っている部分の文字が僅かに判読出来る部分がある。次のように読みとれる。

はた。玄妙観の仲店をうろつく人々の……知りた^いと激しく僕は思^った。彼等が特に仲が^いのかと思^ったが、暫く歩くと、又、

二

資料④大谷大学資料にも破り取つてあとに文字が少し残されているので、提示してみる。

と思はれた。玄妙観の仲店をうろつく人々の……

交互に歌ふので……なかなかいゝ節廻しで、文句を知りたいと激しく僕は思^った。彼等が特に仲が^いのかと思^ったが、暫く歩くと、又、二

この削除部分の解明について、2008年頃に新潮社の『小林秀雄全集』の編集者・池田氏に伺つてみたが、『文芸春秋』の削除された部分を探すことは不可能だと言われた。それは「文学界」昭和十三年六月に小林秀雄が「雑記」という題で掲載された文章でわかつた。「然し僕の心の裡で何かが変わったらう、自分でもはつきりしないが見物して来た戦後の支那の風物は、僕の心のうちの何かを変へたろうと感じてゐる。そしてそれは新鮮な精気として確かに感じられてゐる。」と述べ、小林秀雄はこれによつて何らかの心の中に変つたのではないだろうか。

その後、小林秀雄は、昭和十四年六月に『文学界』に、再度、「蘇州」の中で削除された部分の一部と思える内容を記述している。

二人は搾り乍ら交互に歌ふのである。素朴仲々いゝ節廻しで、文句を知りたいと思^った。こゝでは特に仲よく商賣してゐるのかと思^っつたら、暫く歩くと、又、二人で交互に歌ふ同じ歌聲が聞え、

「同じ店が向ひ合つてゐた。僕は又足を停めて歌を聞いた。

「文芸春秋」誌上の残存した言葉と『文学界』の再録を比べて見ると、次のような違いがある。「文句を知りたいと激しく僕は思^った」の言葉を「知りたいと思^った」と多少変わったことである。続けて掲載した文章は『二人は搾り乍ら交互に歌ふのである。仲々いゝ節廻しで、文句を知りたいと思^った。こゝでは特に仲よく商賣してゐるのかと思^っつたら、暫く歩くと、又、二人で交互に歌ふ同じ歌聲が聞え、同じ店

が向ひ合つてゐた。僕は又足を停めて歌を聞いた。』という内容で、さすがに「慰安所」に関しての記述は控えていて、「蘇州」の原文復元とはなっていない。

この四つのタイプの資料を整理して見ると、前掲の四つの資料は三二頁から三一四頁まで削除されて、小田切秀雄の先行論には「p312〜p313 迄削除された」と述べている。しかし、実際は三二二頁から三一三頁まで削除ではなく、三二二頁から三一四頁までが削除されているのがわかる。

ここで、小林が中国で何を視たのかを知るため、もう少し「文芸春秋」の紀行文「蘇州」の内容に触れておく。

また、日本文化の進出については、

チンタン、チンタンと言つて手を出す、仁丹の事だつた。こちらへ来てから仁丹の廣告といふものには感服してゐた。どの街へ行つても仁丹廣告が眼に附かぬ事はない。城壁に大きく仁丹は無論の事だ。碑門の道貫古今などといふ字を見事な字と思つて見ると、直ぐ傍に抜からずに仁丹とある。日本の宣傳で利いてゐるのは仁丹ぐらゐのものだらう。

僕のテーブルに來た女は、ポロポロになつた流行歌集を帯の間から出して聲を張り上げて歌ふ。處女の心はそよ風の、ささやくまゝに涙して、と言ふのである。あとの文句は忘れた。繰返し繰返し歌ふ。何と言ふんだ、その歌は、と聞くと、ちよつと休んで、

「處女戦線」さと答へた。僕は考へるのを止めて、歌を聞いてゐたが、一體これはどういふ意味の歌か、と考へ始めざるを得なかつた。

「蘇州」の中の杭州では夜遅く一人で日本人の女ばかりいる酒場で飲んでゐた。その情景の記述では、軍歌が流行していたのが見られるが、三つの軍歌のうち「拝啓御無沙汰」と紹介されていたのは「上海だより」のことである。昭和十三年一月、ポドル・レコードから発売された「拝啓御無沙汰しましたが」で始まる歌であるため、小林秀雄が曲名を覚え間違えたのだろう。「兵隊さんは、「露宮の歌」歌詞は「勝つて来るぞと勇ましく」で始まる軍国歌謡である。昭和十二年九月、コロムビア・レコードから発売された。「愛国行進曲」は「見よ東海の空あけて」で始まる政府公募の軍国歌謡の当選曲。昭和十二年二月発表された。小林秀雄は「蘇州」の中で「露宮の歌」も「拝啓御無沙汰」も東京で暇人が歌ひ暇人が聞けば、成る程感傷的とても形容して置いてよろしいだらうが、感傷的などといふ曖昧な言葉は、場所さへ變はれば何んの事やらわからないのである」と述べている。「處女戦線」は昭和十二年七月にポドル・レコードから発売された。歌われた軍歌は、すべて新曲の流行歌と分かる。しかも、政府の統制を受ける軍歌でありながら、日本人の女性らが歌集をポロポロになるまで歌っているのは、異国での寂しき、国への懐かしきと見えるのだろう。正確に本土の国民に情報伝えるのが小林秀雄の気持ちであつたのだと思う。

日本文化のルーツであった寺院や庭園についての文化考察では

名所見物は、杭州でも南京でも懲り懲りしてゐたので、まるで氣が乗らなかつたが、見ない譯にもいかず、不得要領な氣持ちで車に揺られる。

寺も庭もずる分見た。どれも大同小異である。蘇州にはことに庭園が多く、留園、西園、可園、遂園、拙政園、滄浪亭、などと手帳に書いてあるが、どれも庭園といふより廢園と言ふべきで、それも別して荒れたといふ趣もなく、たゞ下らぬものが下らなく腐つて壞れてゐるさまだ。獅子林といふのが、蘇州第一の名園と言はれ、これは修理保存が、ほゞ完全に近い、つまりその馬鹿々々しさもよくわかる。繁華な街中に、嚴めしい鐵門のある見上げるばかりの土塀を廻らし、池を掘り、岩を畳み、洞を通じ、橋を渡し、亭を作り、廻廊を廻らし、たゞもう呆れ返つた不様である。案内には、相傳為畫師倪雲林所構とあつたが、嘘を付け、と言ひたくなる。庭を作つてゐる材料は要するに岩なのであるが、龍安寺の庭を知つてゐる僕等には、言葉もないのである。

現在、世界遺産になつた蘇州の庭園群に対して、近代批評の確立者とされた「知の巨人」小林秀雄は珍しく毒舌を吐いた。小林には中国の「中控(中心統合・中央中心支配)⁵⁾」思想を具体化した蘇州庭園が馬鹿馬鹿しく映つたものと思われる。中国の庭に現れた「趣味頹廢の廢園」は「住んでいる人々の荒んだ心」と有機的に結合し、廢頹した

文化の樣態と把握されたものと思う。

小学校についての言及は注目し価値する。慰安所や破壊した街などの荒廢した庶民生活、俗悪な文化遺産、期待した寒山寺から受けた失望など落胆を重ねてきた一方、小学校は次のように描かれている。

蘇州で一番よかつたのは小学校で、僕の見たのは雙塔初級小学校といふ(略)清潔な小ぢんまりとしたものであつた。生徒がピンポンをしてゐるのを見た。石の床にネットの代りに長椅子を並べ、三年生ぐらゐの生徒が五六人負抜けて勝負をやつてゐる。智慧は大分遅れてゐるのだ。日本の子供なら白墨でラインぐらゐ引つ張るだらう。それに片側に凭れる背のある椅子など平氣でネットには使ふまい。

僕に挨拶した。僕は思ひ掛けなかつたので、非常に嬉しかつた。男の子も女の子も一緒に大部分小ざつぱりした服装である。

小林秀雄は「蘇州で一番よかつたのは小学校」とし、そこで、一生懸命に勉強する小学生の姿を見て、中国の変わつていく未來について、ひそかに考えをめぐらしたものと思う。中国民衆についての感想は、「生活というものの他何をめさず、ただひたすら生活する生活」と記載し、一般人の生活は困窮の状況であつたことを伝えている。

おわりに

「蘇州」というタイトルで書いた紀行文が、蘇州より杭州を多く紹介する内容になっていったことから、相当量の文章が削除されたものと推測できる。

日中戦争がはじまると、政府は国民を戦争に動員するための体制づくりをはじめた。戦争への批判をおさえるため、新聞や放送を統制し、出版物に対する検閲を強化するなど制限をきびしくした。こうして、思想や表現を制限することで、次第に国民を知る自由を奪っていった。学校でも軍国主義教育がすすめられた。

小林秀雄が中国に向かう役一ヶ月前の昭和十三年（一九三八）二月、『東京朝日新聞』に発表した「思想統制とデマ」で小林は、「今や発禁問題は、編輯者達の頭痛の種となつてゐる。執筆者等も、昨年末の検挙以来、急速に延びた言論取締りの手を眺めて茫然としてゐる。今日国民は、思想統制の必要を是認してゐる。又この大過渡期に発動する政府の政策が、勢い大過渡期的性格を帯びざるを得ない事を認めてゐる。」と述べ、言論統制への反骨を覗かせている。

その翌年、「蘇州」の削除について、「削除の理由を聞かされ成る程と思ひ、これは僕が無邪気に筆を走らせ過ぎた為で、別に不服には思わなかつた。」と述べた。赤裸々な「蘇州原本」の記述内容が削除されることを承知していたことを伺わせる文章である。

小林秀雄は、後年「文学は平和のためにある、戦争のためにあるではない。」ということを明言していた。プロパガンダ的のマルクス主

義文学の画一性没個性的傾向にいち早く反旗を翻した当時の文壇の心的論客であった。「歴史はわれわれの祖先が築き上げた足跡である、これをジロジロと自虐的検察官の眼をもつてあばきたてるような見方でなく、母親が愛児を追慕するような慈愛の心で、その当時の環境や状況、立場、心情を理解すべきである。」といった意味の史観を述べていたことを記憶する。まことに至言である。

現在も形を変え品を変え、プロパガンダは世界にはびこっている。私はこの小林秀雄の残した「文学は平和のためにある、戦争のためにあるではない。」という言葉がいかに大切であるかということを感じずにはいられない。

〔注〕

- (1) 小田切秀雄『増補版昭和書籍／新聞／雑誌発禁年表下』（昭和五年五月、明治文献資料刊行会）
- (2) 平野久美子『新聞集成昭和編年史・昭和一三年度版2』（平成三年五月一日、新聞出版社）
- (3) 伊藤整『青野季吉・小林秀雄集 日本現代文学全集 六八』（昭和七年一月、講談社）
- (4) 小林秀雄が昭和十三年（一九三八）二月、『東京朝日新聞』に発表。発禁問題は『文学界』昭和十三年一月に続き、同年三月、石川達三の小説「生きてゐる兵隊」掲載の『中央公論』も発売禁止となり、内務省による言論統制が急激に強まった。昨年の検挙は昭和十二年一月に、マルクス主義者山川均の検挙。彼の原稿はすべて「掲載禁止」となった。
- (5) 中絶では国家が一定の方針に従つて、制限と指導をすることである。

小林秀雄「蘇州」をめぐって (陸艶)

(ルー エン) 文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導・三谷 憲正 教授)

二〇二一年九月三十日受理